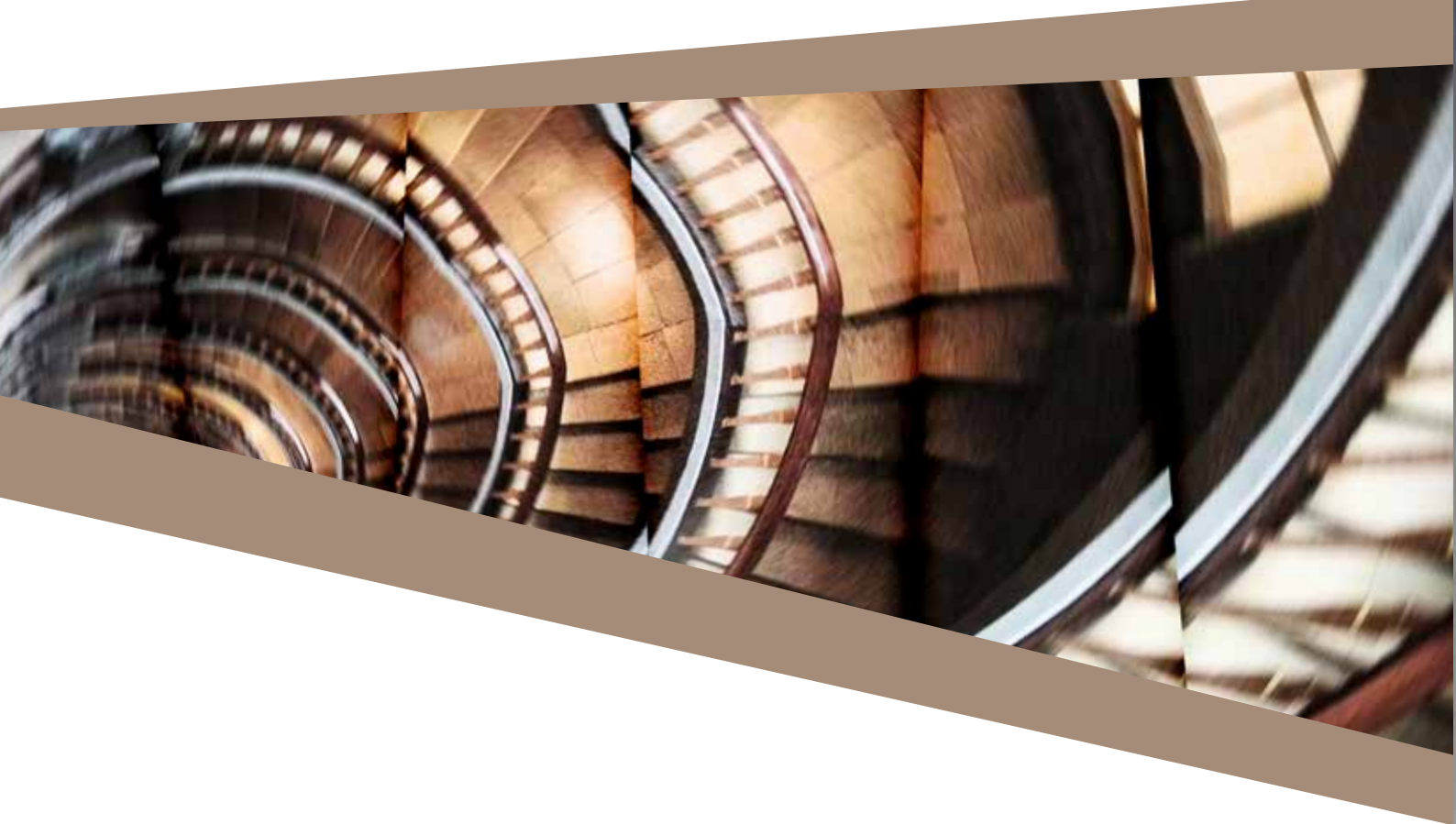




大阪大学総合学術博物館
記憶の劇場
大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座
展覧会



主催：大阪大学総合学術博物館
共催：大阪大学文学研究科
連携：あいおいニッセイ同和損保・フェニックスホール
大阪新美術館建設準備室
公益財団法人吹田市文化振興事業団（吹田メシアター）
豊中市都市活力部文化芸術課
能勢淨るりシアター
兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター）
公益財団法人益富地学会館
助成：平成28年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」
協力：大阪大学21世紀懐徳堂

文化芸術ファシリテーター育成講座事務局
〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-13（大阪大学会館内）
大阪大学総合学術博物館
mail: yamazaki@museum.osaka-u.ac.jp
お問い合わせフォーム: <https://kiogeki.org/contact>

2017.2.27日 → 3.11日

[開館時間] 10:30～17:00（入館は16:30まで） [休館日] 日曜日 入場無料

大阪大学総合学術博物館 待兼山修学館（大阪府豊中市待兼山町1-20）

ごあいさつ

この度は、展覧会「記憶の劇場」にご来場頂きまして誠にありがとうございます。

この展覧会は、平成28年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」に採択された「記憶の劇場—大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座」の1年間の成果を皆様にご覧頂くものです。

この事業では7つの個別のプログラムがあり、受講生はそれぞれにプログラムに参加して1年間の講座を受講して参りました。その取組は、大阪、化石、音楽、演劇、ドキュメンテーション、災害などと扱うジャンルは異にしていますが、共通しているのは「記憶」の一点です。記憶と言っても様々、忘れられない記憶や忘れてしまいたい記憶、また忘れてはならない記憶もあることでしょう。またそれは個人のものととは限らず、何かの共同体や組織の場合もあるでしょう。この事業は、そんな様々な「記憶」を時には本学博物館の資料を活用し、また時には大阪市内にフィールドワークして、それらを掘り起こして新しい視点から見直して参りました。

ここで展示されている記憶の数々に、皆さんの記憶とどこかで響き合うところがあればそれにまさる喜びはございません。どうぞごゆっくりお楽しみ頂ければと思います。

大阪大学総合学術博物館長
永田 靖

連携機関アドバイザー

石橋 隆	公益財団法人益富地学会館研究員
尾西 教彰	兵庫県立尼崎青少年創造劇場(ピッコロシアター)業務部副課長
菅谷 富夫	大阪新美術館建設準備室研究主幹
古矢 直樹	公益財団法人吹田市文化振興事業団(吹田メイシアター)常務理事・事務局長
松田 正弘	能勢淨るリシアター館長
宮地 泰史	あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール企画事業担当チーフ・マネージャー
守屋 浩一	豊中市都市活力部文化芸術課

事業担当者

永田 靖	大阪大学総合学術博物館・大阪大学文学研究科(事業推進者)
橋爪 節也	大阪大学総合学術博物館
上田 貴洋	大阪大学総合学術博物館
伊藤 謙	大阪大学総合学術博物館
横田 洋	大阪大学総合学術博物館・大阪大学文学研究科
渡辺 浩司	大阪大学文学研究科
伊東 信宏	大阪大学文学研究科
古後奈緒子	大阪大学文学研究科
山崎 達哉	大阪大学総合学術博物館・事務局
濱村 和恵	デザイン

1「記憶の劇場」オープニング講座、クロージング・シンポジウム

オープニング・セミナー

日時：2016年7月23日(土)、24日(日)

会場：大阪大学学生会館21世紀懷徳堂スタジオ、
大阪大学文経中庭会議室

展覧会「記憶の劇場」

会期：2017年2月27日(月)～2017年3月11日(土)

会場：大阪大学総合学術博物館待兼山修学館

クロージング・シンポジウム

日時：2017年3月11日(土)

場所：大阪大学学生会館21世紀懷徳堂スタジオ

2地域文化の研究による発信・顕彰とメディアリテラシー

担当：橋爪節也

歴史ある都市ながら大阪は過度の“おもしろイメージ”で語られがちです。大阪が培ってきた文化的価値を、《中之島》《道頓堀》の二つの地区をテーマに、街の魅力を発信・顕彰する小冊子の作成をシュミレーションしました。

水都大阪のシンボルであるこれら二地区は、「水の回廊」と呼ばれる運河でつながりながらも、街の個性が異なります。江戸時代の《中之島》は蔵屋敷が建ちならんだ経済の中心であり、近代以降はホールや美術館など文化施設が集積し、行政はバリのシテ島を意識した「都市美」を目指しました。近松門左衛門の時代からの芝居町である《道頓堀》は、劇場や飲食店が溢れ、現代に至るまで日本有数の繁華街としての歴史を刻んでいます。

二班の成果は、完成した印刷物に結実していますが、さらに、街の魅力を探求する過程を展覧会で提起します。好奇心を街や都市へと開いた“エコ・ミュージアム”の可能性への挑戦です。

4オペラ『新しい時代』をめぐるワークショップ

担当：伊東信宏

三輪眞弘氏のオペラ『新しい時代』(2000年初演)は、14歳の少年一人しか登場しない特異な作品です。このオペラを再演することを目指して、本年度は演奏会「声のような音／音のような声」を開催しました。ワークショップでは、この演奏会とオペラ自体について、受講生とともに予習し、広報の方法などを考え、リハーサルに立ち会いました。特に「言葉の影、あるいはアレルヤ」と題された作品(これが後にオペラの音楽的核になります)については、一部の受講生がキーボード奏者として出演しました。幻燈のような装置を取り囲んで4人のキーボード奏者が巫女のように座ります。その幻燈に映し出される楽譜を無心に演奏していると、ただの電子音に聞こえていたものが組み合わさって、一瞬「声」が浮かび上がるのです。その声は誰が発したものであったのか。それは何を伝えようとしているのか。そういう体験を通して、「言葉」の不思議さを見つめ直しました。

7ドキュメンテーション／アーカイヴ

担当：古後奈緒子

活動⑦では、ある対象について人に受け渡す手がかかるとなるメディアづくり(vol.1)と、誰かが遺してくれたメディアを再生するWS(vol.2)を計画しました。

vol.1 エリアでは、維新派『アマハラ』公演の現場で、受講生個々が「何を」と「いかに」に揺れながら動いた成果を公開します。

vol.2 エリアでは、劇団石(トル)が受け継いだものをめぐるWSに前後する、受講生の記録者としての変化を、remoscope の力を借りて浮かび上がらせます。

関係の中で自発的に動き自分で決められる、遺された物や風景に不在を重ね見る、そうした力を身につけた俊敏なメディア＝人は、博物館に収めることができません。けれども、記録をしようとする人みなに訪れるわけではない「受け渡される」という現象を、活動⑦エリアでは見つけていただけることでしょう。



3自然科学に親しむ・触る・アートする

担当：上田貴洋、伊藤謙

活動③では、理系研究者の視点、特に自然科学の中でも化石・鉱物のアートとしての魅力を紹介すると同時に、その科学的視点からも考察しました。具体的には、鉱物標本を結晶学的な視点からだけでなく、石橋隆氏(公益財団法人益富地学会館)の指導により、結晶の美しさをアートとして表現・撮影する実習を行いました。化石標本を利用する学習として、我が国における古生物資料のマスターピースといえる本館蔵マチカネワニ化石(国の登録記念物)を中心にした実習を展開してきました。展覧会では、受講生との協働で制作した、柴田純生氏(京都造形芸術大学教授、立体造形作家)、川崎悟司氏(インディペンデント・イラストレーター)、古田悟郎氏(海洋堂所属造形師)の作品を展示し、実習の中で制作したマチカネワニの頭骨レプリカを展示します。地球そしてマチカネワニの“記憶”を、自然科学を通じ、アートとして表現する本展示にご期待ください。

5パフォーミング・ミュージアム Vol.1

担当：永田靖、横田洋

私たちは、大阪大学総合学術博物館に寄託されている「森本薫関連資料」を題材に活動をして参りました。大阪生まれの劇作家森本薫は日本のモダン・ドラマを代表する劇作家です。広くは劇団「文学座」での活動が知られており、とりわけ『女の一生』は現在でもロングランを続けている戦後演劇を代表する作品と言っても過言ではありません。

私たちは、この森本薫について関連のレクチャーを受け、また専門家を招いてのシンポジウムを開催して、本格的に学び始めました。また実際に博物館に所蔵されている「資料」を閲覧調査して理解を深めました。さらに事業の目的の一つを森本薫についての演劇作品上演に置き、演出家を招いてワークショップを行い、作品への接近の仕方を模索しました。

このように森本薫と様々な向き合うことで、その作品世界を多角的に、また深みを持って理解できたのではないかと感じています。

6紛争・災害のTELESOPHIA

担当：山崎達哉

紛争や自然災害等で破壊、あるいは喪失された様々な文化や芸術を復興／再生する際に人々が協力し合い、新しく(もしくは再び)コミュニティを形成している例は国内外にみられます。私たちは1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災に焦点をあて、神戸市を中心に現地へ足を運び、たくさんの人と出会い、お話を伺うことで調査と考察を進めました。その過程において、たくさんの助け合いや協力があることを知りました。当時の出会いから生まれた関係は現在まで続いており、震災から22年経過した現在でも少しずつ広がりをみせています。

たくさんの出会いや貴重な声を届けるべく、展覧会を準備しました。また、展覧会期間中にもイベント(上演)を開催します。展覧会やイベント(上演)によって人の輪を広げ、震災と共生について考える機会を設け、出会った方の心や声を少しでも伝えられたらと思います。